

美食家

鶴川第二中学校 三年

齊木さいき彩音あやね

世界は、ほんの小さなきっかけから一瞬にして変わってしまった。自然災害や小さな意見の対立からではなく、空が好きな一人の少女の言葉から、だ。

「ねえ、『空』って食べたことある？」

少女はそう聞くと、少し長い箸をカメラみたいにして空にかざす。空の一部分をつまむようにして、すんなりと箸の先に入ってきた小さな空を、少女は当然のように口にした。今思えば何度も食べてきたのだろうが、空を噛み締める彼女の、あの笑顔は忘れられない。

何日も経たぬうちに、噂というものはどんどん広まっていく。もちろん私は、彼女のためにも、空を食べてみて美味しいと感じてしまった自分のためにも、この事実を隠そうと思った。しかし、運悪く通行人がそれを見ていたようで、瞬く間に噂は飛躍していった。

テレビのニュースになる頃には、知らない情報がたくさん出回っていた。けれど、ほとんどの人が、肝心なところは口にしない。空を食べたことのある人は知っていると思うが、私があの少女と確かめ合ったこととして、「空は日中しか食べることができない」「食べた部分は夜空になる」「次の朝には空は回復する」ということはわかっていった。重大な事実には目を背けながらも、やがて空の味は世界中に広まっていった。

さあ、世界中の人々が空の美味しさを知ったことでどうなったか。まず、空の争奪戦が始まった。まるで人気アイドルのチケットがすぐに売れてしまうように、朝早くに昼空は食べられてしまう。つまり一日のほとんどが夜空なわけだが、奇妙なことに太陽光は届いているようで、生活のサイクルは崩れなかった。そうは言ってもほとんどの人が、明るい空がすぐに消えてしまうことに悲しみを抱いていた。けれども、空の味の虜になってしまった人も多くいて、この現状を回復するには時間がかかりそうだ。

と、私も今この瞬間までは思っていた。でも、やはり世界は狭く、もろい。一人の少女の言葉ひとつに左右され、大きな竜巻のようにどんどん巻き込んで変わっていく。それこそ、起点の意図せぬままに。

「ねえ、『夜空』って飲んだことある？」

私の隣に座る少女は、スプーンで夜空をすくって私に見せた。私の目には、久しぶりにみる明るい空と彼女の笑顔が映っていた。

審 査 員 講 評

「空を食べる」から始まり「夜空を飲む」で終わる対比が素晴らしいかったです。またファンタジックな世界観にリアリティを与える細やかな設定や工夫が随所であり、物語のなかへ自然に引き込まれました。何より、この物語が描く世界観の美しさや、心地よい文章のリズムが素晴らしく、ずっとその世界に浸っていたくなるような作品でした。

—— KEN THE 390

市長賞
齊木彩音「美食家」